
明日には花になろう

森沢みなぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日には花になろう

【Nコード】

N1025BA

【作者名】

森沢みなぎ

【あらすじ】

花になれていない未熟な少年少女たち。そんな彼らが花になるために青春を謳歌する。

美人愛、遠くの親類より近くの美人

隣人愛だの遠くの親類より近くの他人だとか、世界には他人とも仲良くしましよーって言う言葉がいくつもあるけど、それでもやっぱり他人は他人と考えるてしまうのが普通であて、他人のために命を張りましようなんて考える人は誰一人としていないわけだ。しかしながら、それは極論であつて、流石に命とまでいかないものの少し親切心くらいはある。そしてそれは電車で老人に席を譲つてあげるとか、道に迷つてる人を道案内するとかそれぐらいのレベルである。しかし、例外はある。親切心を向ける人が美女か美少女の場合、やっぱり、可愛い子、美しい人には恩を売っておきたいし、お近づきになりたいと思うのが男の性だ。それは俺も変わらない。だから見知らぬ人でも美女、美少女なら親切心は向上する。しかし、しかしだ。その例外にも例外が存在するのだ。それはその場の状況だ。もし、美女、美少女が私のために死んでくださいと言っても死ねるわけがない。まあ、これも極論なのだが。

ここで例え話をしよう。街の不良たちに美少女が絡まれていたとする。それも超がつくほどだ。自分の人生においてこれ以上の美のつく人には出会わないだろう、と思うほどの美少女だ。もちろん、お近づきになりたいと思うのが普通だ。そしてその彼女は不良に絡まれている。これは何ともオイシイ状況だ。華麗に割つて入つて助けだせば、ヒーローだろう。しかし、そんな話は漫画やドラマの話なわけで。実際に割つて入れればボコボコにされることは目に見えてる。

ここで現実へと話を進めて行こう。只今、街のはずれ人通りの少ない裏道。買い物帰りで遭遇したのは、例え話の状況。

一人の美女が金髪と茶髪の二人の不良に絡まれてる。いや間違えた。一人の超美女に、と書き換えておこう。

腰まで届くしなやかで艶のある黒髪、白くて一点の染みもない肌、

整った顔立ちに黒を基調としたセーラー服を着こなす超美女。その姿は何処か戦後失われた古風な大和撫子を思わせる。

これほどの美という言葉がぴったりな人はない。断言できる。

いや、それよりも問題なのはこの状況をどう打破するかだ。敵は二人、目標を両サイドで電柱に追い込むように展開している。かれこれ五分くらいお茶に誘っているが、目標はいつこくに頷く様子はない。つまり、行く気はない様子。ナンパは短時間勝負だ。短い時間でどれだけ自分に興味を持たせるかにかかっている。ましてや五分以上誘ってダメならそれは負け戦だ。そうそうに諦めるのが鉄則。

本題に戻る。ここで俺はどうするべきか。割って入るか、見過ごすか。割って入ったら不良たちにボコボコにされるのは当然。正直言って痛いのは嫌いだ。しかし、超美女は大好きだ。どちらから天秤にかけると言われたら、余裕で超美女に傾く。しかし、痛みに耐えれば超美女とお近づきになれるというわけじゃない。もしかしたら、ボコボコにされている間に逃げられてしまうかもしれない。

つまり、喧嘩沙汰にせずに超美少女から不良たちを引き剥がしたいわけだ。

そこで名案が思い浮かぶ。これなら例えお近づきになれなかったとしても損をすることはない。

ちやつちやと準備を進めて、意を決していざ戦陣へと大手を振ってゆく。

「あ、もしもし警察ですか。今、超美しよ、じゃなくて女の子が男にから　げふう！！」

何故か言いきる前にはほかに強烈な痛みが走った。

いや、メツチャ痛い！！

「テメエなに人呼ぼうとしてんだよ」

いつの間にか不良二人がこつちにきてる。

「なんでバレた！！」

「あんだけ人のこと見てりゃ誰だつて気付くだろ」

不味い。ただでさえ他力本願なんて情けない戦法をとってるのに、

あまつさえ失敗するとは。このままでは痛い思いをしたうえに近づきになれない。

むうん、どうしたのか。

「ホントテメエ調子こんでんじゃねえぞ。ぶつ殺されてえーのか」
「やばいやばい。じりじり近づいてくる。」

拜啓 お父さんお母さん

先に旅立つ愚息をどうかお許してください。息子は男としての信念を貫いて、その結果夢半ばにして倒れます。ですが、この想いは全国のモテない男子たちにきつと伝わったと思います。モテなくても自分からチャンスを作り出す不屈の心は不滅であり、伝承されていくところでしょう。

「なにさつきからぶつぶつ言ってただよ!」

「ごほお!」

蹴りが見事に腹部に入ったあ!

「昼に食べた餡かけ焼きそばが全て餡になって出てくるところだったぜ……」

とかっこつけた所で現状は変わらず。

嗚呼、どうしたら逃がしてくれるだろう。

「お、おい。コイツ本当に警察電話してやがる!」

もう一人の男が地面に転がってる俺のケイタイを指さしながら叫んでいる。

『もしもし、こちら御神警察署です。どうされました』

おお、なんとという奇跡。

「お前なにマジで通報してんだよ」

「俺に辞書に冗談という言葉ない!」

と親指を上げる。

「なんだコイツ。気持ち悪い」

失敬な。

「マズイ、逃げるぞ」

と言つて不良たちはずらかる。

はあく、なんとか五体満足に乗り切ることができた。しかし、物凄いかつこ悪い姿を見せてしまった。これじゃあ、お近づきになるどころか、たぶん変な目で見られているだろ。

できるだけ、超美女と目を合わせないようにして立ち上がり、体の埃を落とす。ケイタイを拾って耳に当てる。

「あ、すみません。なんか俺の勘違いみたいでした。はい、はい、本当にすみませんでした」

テキトウに事情を説明して、警察からは軽く注意されて終わった。「ちよつといい？」

ケイタイをしまった所で声をかけられる。

声が聞こえた方へ顔を向けるとそこには先程の超美女。その黒く綺麗な瞳は確実に俺に向けられている。

え、なにどういうこと、もしかしてこれは脈アリ！

「鼻血が出るわよ」

「へえ??」

なんともまあ間抜けな声が出してしまった。鼻に手を当ててみると確かに血が付いていた。

なんともかつこ悪い。

「お、教えてくれてありがとう……」

ポケットからティッシュを取り出そうとするが見当たらない。

「これ、使って」

差し出されたのは白いハンカチ。

なんて良い子なんだ。こんな哀れなピエロにこんなにも優しく接してくれるなんて。

「ありがとう。でも、こんな綺麗なハンカチ汚してダメにするわけにはいかないから」

おお、我ながらなんて紳士的な切り返し。自分で自分を褒めてあげたい。

「別にいいわ。どうせもう捨てるつもり、使ったついでに捨てていてくれる?」

「あー……そうですか……分かりました……」

超美女からハンカチを受け取って鼻に当てる。もともと、そんなに酷い鼻血ではなかったの、それ以上血がでることはなかった。

「お礼を言うのはこっちの方。まったく道を訊いたらいきなり『お茶に行かない』なんて聞くから迷惑してたの」

はあ？

「え、なにじゃあ自分から話しかけたの、アイツらに？」

「ええ、そう。だってここ何処か分からないし、あの人たち以外誰も近くに訊ける人いなかったのよ」

道理でこんな超美少女がこんな所にいるわけだ。この裏道は人通りが極端に少なくて柄が悪い奴らの溜まり場にまっついている。初めてこの町にきた人以外は誰も極力通ろうとしない道だ。

「でも、いくら道に迷ったからってアイツらに訊くことないだろ
自分から絡んでくださいって言うてるみたいなものだ。」

「どうして？」

「どうしてって。どう見ても素直に道を教えてくれるような奴らじゃないだろ」

「何処が？」

「何処がって……」

嗚呼、なんだろ、この不毛な会話。というか、この子もこの子でなんだか世間慣れしてないっていうか、箱入り娘みたいっていうか。普通は不良の区別くらいつくだろう。

「とにかく、さっきみたいいな人に話し掛けない方がいい。大抵、悪い人だから」

「貴方は人を見かけで判断するのね」

痛いところをついてくる。なんか俺が人を信じれない寂しい人間みたいだ。でも、今の時代素直さだけじゃ生きていけないのも事実だ。

あゝあ、嫌だ嫌だ。

「まあいいわ。それで貴方はどっちなの？」

「へえ？」

「いい人なの？ 悪い人なの？」

「見てわからない？」

超美女は俺を上から下まで見回す。

「そうね、変な人？」

「なんでだよ！」

俺が憤怒の形相を浮かべているのを尻目に懸け、超美女は口に手を当てて上品に笑う。

「ごめんなさい。そうね、貴方はいい人“そう”だわ」

「そう？」

何故か一言余計だ。

「だって貴方と私は会ったばかりでまだお互いのことを理解してないのよ。まだいい人と判断するには早いんじゃない？」

む、確かに。俺の見た目がいくら人畜無害で女の子が襲う甲斐性がなさそうといっても、実は心の奥底には欲望に塗れた狼が潜んでいるかもしれないからな。

.....

まあ、そんな狼は潜んでないんだけど。

「ということ、はい」

そう言って超美女は一枚の紙切れを差し出してくる。

「なにこれ？」

何気なく受け取るとそこにはこちら辺の地図だった。そしてある一点に赤く印が付いている。

「本当に貴方がいい人かどうかテストします」

彼女はまるで抜き打ちテストをする学校の先生のように宣言する。

「私をそこまで案内してください」

そういえば道を訊いてたって言ってたな、とその地図に目を向ける。

「えっと、ここはもしかして君の家？」

「そう、私の新しい新居。今日、この町に引っ越してきたんだけど

迷ってしまったの」

「そーか、そーか。ここが新居か。」

「どうかしたの？　すごく嬉しそうね」

「いや、なんでもない。こっちのことだから」

首を傾げているが、とりあえず道案内を始める。

「といつても裏道から地図の印まではそれほど時間はかからなかった。どうやら迷いながらも的確な方向には進んできたようだ。」

地図の赤い点はあるマンションを指していた。何処にでもあるようなマンションだ。

「けど一人暮らしするには少し大きすぎる気がする。家族も一緒なのか？」

「ありがとう、本当に助かったわ」

「このぐらいはお安い御用だよ。なんせ俺はいい人だからな」

と笑う。

超美女はそれにつられたように笑うと「それじゃ、さようなら、いい人」と言っつてマンションの中へと消えて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1025ba/>

明日には花になろう

2012年1月2日13時48分発行